

## 自称詞と対称詞、および他称詞に関する一試論 ——英米小説を資料として

杉山 眞弓\*

大山 中勝\*\*

The researchers have explained the psychological difference by analyzing the usage of English address terms for the speaker, listener, and other individuals. Using data from American and British literature, we have attempted to concentrate on pinpointing this specific topic. After sorting data, memos were created to cover various categories. These memos were utilized to form basic conceptual frameworks for illustrating address terms in English.

### 1. はじめに

日常生活における会話の中で、人が相手をどう呼ぶか、どう呼んでもらうことを望むかという問題は、単に言語学上の問題にとどまらず、心理学的・社会的にも大きな意味を持った問題である。これまでも「話相手をどう呼ぶか、話相手のことをどういう言葉で表現するかは、対人関係上の大きな問題であり、待遇表現の基本的な問題でもある」(斉 1988: 1)と、話者が相手をどう呼ぶかということの重要性については論じられてきた。また、人称代名詞、すなわち自称詞と対称詞、および他称詞に関する研究も行われている。

しかし、自称詞と対称詞、および他称詞に関する研究は会話調査の形で行われる場合が多く、実際に話された会話を分析することによって話者の意思や意図を探る研究は進められてきたが、文学作品の中の会話でどのように使用されているかを考察した研究はきわめて少ない。とりわけ英語における自称詞と対称詞、他称詞の研究に関しては、総合的に扱った研究は数が少ないようであり、特に英語で書かれた文学作品における自称詞と対称詞、および他称詞の研究はまだほとんど進められておらず、今後取り組んでいくべき課題である。

本研究の目的は、英米の文学作品の会話に現れた話し手(話者)と聞き手(相手)および第三者の呼び方に焦点を当て、特に名前の呼び方の変化から読み取れる話者の心理を分析することで、自称詞と対称詞、および他称詞に対人関係上の問題が反映されているという点を検討することである。

---

\*千葉大学大学院人文社会科学研究所, \*\*言語教育センター

## 2. 先行研究

まず、自称詞と対称詞、他称詞の定義を明確にしておきたい。本論では、自称詞を「発話の中で話者が自分自身を指示したり、自分自身に言及するために用いる語のことを言う。つまり話者が自分を何と称するかという意味で自称詞なのである」(鈴木1982: 19)という定義で捉えている。また対称詞についても鈴木「話者が発話に際して、発話の相手を指示したり、あるいは言及したりする語である。つまり話者が自分の相手として、自分に対峙している人を称する語という意味で、対称詞と呼ぶわけである」(1982: 19)という定義で考えている。他称詞については、自称詞・対称詞以外の三人称代名詞で表現できるものと見なしている。

先行研究であるが、鈴木(1982)は社会言語学的手法で自称詞、対称詞に関する法則を導き出し、文化と社会の中で分析している。欧米の社会では通常ラストネームよりもファーストネームで呼び合うケースが多いが、日本ではファーストネームよりもラストネームや役職名等を使用するケースが多いと指摘している。自称詞・対称詞の法則を導きだすのに強調している項目は「目上」と「目下」という日本の社会的概念であり、この概念は適切な自称詞・対称詞を使用するのに重要な要因であると分析している。このような「目上」「目下」の批評を中根(1980)は、日本社会においてはタテ社会のためと説明している。陳(2003)は日本社会における親族語彙に関する諸々の研究を列挙している。その一部を紹介すると次のようになる。唐須(1991)は親族名称を中心に分析し、『親族名称の謎』で論じており、武井(1982)はさらに「兄弟姉妹」間で使用されている自称詞・対称詞について具体的に分析している。鈴木(1982)は日本語の自称詞・対称詞に加えて英語の自称詞・対称詞、親族語彙に関する考察も行っている。

ほかにこれまでの自称詞と対称詞、他称詞についての研究には、日本語や中国語を対象としたものとして斉(1988)、鷺山(1993)、王(2009)などが挙げられる。ほとんどは対称詞に関する研究で、自称詞と他称詞に関するものは少ない(陳2003)。英語における自称詞や対称詞、他称詞についての研究には、久保田(2007)が「Don't call her "she."——外界指示と言語内指示」の中でErich Segalの*Love Story*を取り上げて「she」という他称詞について論じたものがある。しかし、英語に関しての研究は日本語や中国語に関しての研究に比べてまだ数が少ない。本論では、英米文学作品の中で英語の対称詞のみならず、自称詞と他称詞にまで範囲を広げて分析したい。

## 3. 研究方法

自称詞と対称詞、他称詞が現れた会話例を英米の文学作品の中から探すにあたっては、これまで研究者らが読んだことのある作品や講義で取り扱われたことがある作品から選り出した。また、英米の文学作品を読解した学生たちにも多くの情報を提供してもらった。しかし、これだけでは事例として不十分であるので、より多くの本を調査するためにインターネットの活用を行った。その方法としては、Googleの書籍検索という検索方法を用いた。検索エンジンにはyahooやgooなど様々なものがあるが、あえてGoogleを選択した理

由は、書籍の文面を拾い読みできるGoogleの書籍検索機能が本調査の目的にかなうものと判断したためである。書籍検索の方法であるが、Googleの書籍検索の「トピックの検索」画面でキーワードを入れて出てきた結果から、条件を絞って探し出すというやり方で行った。自称詞や対称詞、他称詞が現れた会話例を拾い出し、文学作品を抽出した。英語で書かれた作品を検索するために「検索ツール」機能で「ウェブ全体から検索」を指定し、書籍の中身の一部が見られる「プレビュー利用可能」という条件を選んだ。また、「すべての書籍」の項目では、雑誌を除外して「本」に条件を絞った。

上記の方法を用いて最初に自称詞について調べるため、自分を呼ぶ言葉として“T”をキーワードに定めて書籍の刊行年数を「指定なし」にして検索したところ、12億件もヒットした（2013年10月現在）。膨大過ぎる結果であるため、友人や恋人間で自分を愛称やファーストネームで呼んでもらおうとするときの言葉に的を絞った。フレーズ検索を行うためにcall meという語句を“ ”で括り、“call me”という形で入力して刊行年数の「指定なし」の条件で検索したところ、427万件がヒットした。刊行年数の条件を「21世紀」に絞ると、263万件になった。同様に、「20世紀」で調べると78,300件、「19世紀」で調べると94万8,000件がヒットした。さらにヒット件数の数を絞るため、検索条件を増やして“please call me”という語句を入れると、刊行年数の「指定なし」では9万200件になった。この検索ワードの刊行年数の条件を「21世紀」にすると7万1,100件、「20世紀」では5,100件、「19世紀」では463件がヒットした。対称詞や他称詞についても同様の方法で検索を行い、キーワードをより具体的なものにしてヒット数を絞っていき、本調査の目的にかなうような書籍を選び出した。検索ワードとヒット数の一例を以下に挙げる。

## 〈検索ワードと刊行年数の条件別のヒット数〉

検索ワード	指定なし	21世紀	20世紀	19世紀
〈自称詞〉				
“I”	1200,000,000			
“call me”	4,270,000	2,630,000	78,300	948,000
“please call me”	90,200	71,100	5,100	463
“don't call me”	79,900	62,400	5,160	8,580
〈対称詞〉				
“you”	624,000,000			
“my boy”	789,000			
“my girl”	250,000			
“mother”	112,000,000			
“father”	157,000,000			
“my dear”	7,440,000			
“your highness”	199,000	103,000	13,500	273,000
“your highness” king	76,900	28,200	5,240	127,000
“your highness” queen	34,800	28,200	2,180	59,700
“your highness” prince	59,700	28,700	4,010	89,900
“your highness” princess	26,300	18,000	1,250	23,300
“your highness” sheikh	2,330	2,010	62	146
〈他称詞〉				
“he”	941,000,000			
“she”	346,000,000			
“the boy”	5,420,000			
“the girl”	8,580,000			

※2013年10月現在

このようにして選び出した書籍以外にも事例は多数あるに違いないので、より多くの事例からのデータ分析が今後の課題であろう。今回は限られたデータにおける会話例の分析である。

#### 4. 分析

調査対象として選出した文学作品は英国および米国で出版された小説である。偏ったデータになることをなるべく避けるため、刊行年は19世紀、20世紀、21世紀と幅を持たせている。また、昨今は小説のジャンル分けの定義自体が難しくなっているが、一般的に古

典文学、ロマンス、児童文学、サスペンスなどと位置づけられている様々なジャンルの小説から10作品を事例として取り上げることにした。調査対象にした作品は、古典文学としてThomas Hardy (1891) の*Tess of the D'urbervilles*、James Fenimore Cooper (1823) の*The Pioneers*、ロマンスとしてAmanda Browning (2008) の*The Billionaire's Defiant Wife*、Ruth Jean Dale (2012) の*Runaway Wedding*、Julie James (2008) の*Just the Sexiest Man Alive*、Sandra Marton (2012) の*Sheikh Without a Heart*、児童文学としてJohn Holton Crawford (2009) の*Don't call me Michael*、サスペンスとしてCatherine Coulter (1998) の*False Pretenses*、一般小説としてErich Segal (1970) の*Love Story*、Anne Tyler (1995) の*Ladder of Years*である。

分析を行うにあたっては、会話中の話者の心理状態に着目した。代名詞やファーストネーム、ラストネームの用いられ方の変化に焦点を当て、そこに話者の心理がどのように現れているかを分析し、2つの条件で分類した。1つ目の条件は、相手との心的距離を縮めたい、すなわち相手に近づきたいという話者の心理が反映された自称詞、対称詞、他称詞である。2つ目の条件は、相手との心的距離をあけたい、すなわち相手から離れたいたいという話者の心理が反映された自称詞、対称詞、他称詞である。各条件のそれぞれが自称詞、対称詞、他称詞の3種類に分けられるので、作品に現れた会話は6項目のいずれかに該当することになる。以上の条件で作品を分類し、そこに現れた話者の心理を見ていきたい。

#### 4.1. 相手との心的距離を縮めたいという話者の心理が反映された呼び方

話者が会話の中で相手に自分をどう呼んでもらいたいかと告げる時、そこには話者の相手に対する心理が反映されていると考えられる。この項では、1. 話者が相手との心的距離を縮めることを目的とした、自分と呼んでもらう呼び方 (= 自称詞)、2. 話者が相手を呼ぶ呼び方 (= 対称詞)、および、3. 第三者との心的距離を縮めたいという話者の心理が反映された、第三者を呼ぶ呼び方 (= 他称詞) について事例を挙げて分析する。

##### 4.1.1. 相手との心的距離を縮めたいという話者の心理が反映された呼び方——自称詞

ここでは、自称詞における、相手との心的距離を縮めたい、あるいは相手との距離を縮めることを目的とした話者の心理が反映された呼び方の例を取り上げる。

###### (事例1.1.A) Catherine Coulter (1998) の*False Pretenses*

この小説の主人公のElizabethは夫殺しの容疑で裁判にかけられたが、Dr. Hunterと名乗る男の証言により、罪を免れることができた。実を言えば、ElizabethはDr. Hunterに会ったこともなかったのだが、彼は殺人が行われたと推定される時間のElizabethのアリバイをなぜか証明してくれたのだ。以下は、裁判が終わったあとでElizabethの家を訪ねたDr. Hunterと彼女とのやり取りである。

“You would like something to drink, Dr. Hunter?”

“Please, call me Christian, and yes, I’d like a glass of white wine” (p.112).

Dr. Hunterは自分をChristianと呼んでくれと言い、Elizabethとの距離を意図的に縮めようとする。しかし、Elizabethはすぐにファーストネームで呼ぶことはできず、ラストネームで相手呼びそうになり、ようやく最後に相手の要求どおりの呼び方をした。そして、自分のこともファーストネームで呼んでほしいと言った。それが以下の台詞である。

“Please, do sit down, Dr. Hun……Christian. And call me Elizabeth” (p.112).

さらにElizabethは、Christianと互いにファーストネームで呼び合うことの正当性を自分に言い聞かせるかのごとく、以下のように説明する。

She looked at him squarely and added, “Since you saved my life, I would think that last names are a bit ridiculous” (p.112).

殺人罪で死刑になりかねなかったElizabethは、命を救ってくれた相手と互いにラストネームで呼び合うことを、ridiculousだと明言している。このように、ラストネームからファーストネームへの呼びかけの変化は、話者の相手への気持ちの変化を表わす。そこには相手との心的距離を縮めたいという話者の心理が反映されている。

(事例1.1.B) Amanda Browning (2008) の *The Billionaire’s Defiant Wife*

このロマンス小説のヒロインであるAimiは、外科医のNick Berkeleyの有能な秘書として働いている。ある日、AimiはNickの兄である著名な実業家のJonas Berkeleyに紹介された。Nickと良好な関係を築いているAimiは、雇い主である彼をNickとファーストネームで呼んでいるが、Jonasに対しては次のようにラストネームで呼びかける。

‘You might be the type of employer who insists on formality, Mr Berkeley, but your brother prefers a friendlier atmosphere,’ she replied coolly, and he grinned appreciatively (p.18).

雇い主のNickのことはファーストネームで呼ぶAimiだが、出会ったばかりのJonasには反感を抱いていることがこの台詞の前に示されており、彼女は相手をMr Berkeley(原文のまま)とラストネームで呼ぶ。ここには、知り合ってから時間が少ないことによる遠慮の気持ちや堅苦しさと同時に、相手と距離を置こうとする心理が反映されている。そのようなAimiの心理を見抜いたJonasは次のように彼女に告げる。

‘Call me Jonas. I never insist on formality here,’ he declared, and Aimi realized she



had not helped herself. Now she would have to call him by name, or look a fool (p.18).

自分から距離を置こうとするAimiを嘲笑するかのようになり、Jonasは自分をファーストネームで呼ぶことを主張するのである。逃げようとする相手との距離を詰めようとするJonasの心理が、この呼び方に反映されている。この二人のやり取りからは、相手をファーストネームで呼ぶ場合とラストネームで呼ぶ場合の距離感の違いを話者が感じ、意識的に用いていることが読み取れる。

(事例1.1.C) Sandra Marton (2012) の*Sheikh Without a Heart*

このロマンス小説の主人公であるRachelはカジノで働きながら、失踪した妹の赤ん坊のEthanを育てている。そんなある日、某王国のシークのKarim al Safirという男性が現れ、Ethanは我が国の王位継承者なので、自分に渡すようにとRachelに迫った。我が子同様にかわいがっているEthanを奪われまいとして、RachelはシークのKarimと闘うことを決意する。次はそのような彼女をKarimが説得しようとする場面である。

“Yes. We want the right thing for him. There’s no reason we should be enemies.”

“And what is it you see as the right thing, Your Highness?”

“Please. Call me Karim” (p.91).

RachelはKarimを“Your Highness”という敬称で呼び、相手への敬意を示すと同時に、相手から距離を置き続けようとする。しかし、Karimは自分をファーストネームで呼ぶようにと言う。ここには頑ななRachelの気持ちをやわらげ、子供を渡してもらおうという目的を果たそうとするKarimの思惑が反映されている。王族であるKarimが、一般市民のRachelにファーストネームで呼ばせるという行為は、あまり一般的でないものであろう。ここでKarimは、自分の呼び方(=自称詞)を意図的に変えさせることによって、自分のほうから相手との距離を縮め、敵意を薄れさせようとしているのである。ここでは、相手よりも地位が高い話者が敬称で呼ばれることを断ってファーストネームで呼ばせるという行動が、相手と同等の立場にまで降りていこうとすることを示している。敬称からファーストネームへという極端な変化に、話者の心理がうかがえる例である。

(事例1.1.D) Julie James (2008) の*Just the Sexiest Man Alive*

(事例1.1.C) は王族である話者と一般人である相手とのやり取りという、身分の差がかなり大きいものであった。今度はもっと小さなものではあるが、やはり明確に身分の差がある例から、名前の呼び方による距離感の変化を考えてみよう。この小説のヒロインのTaylor Donovanは大手の法律事務所に勤務する優秀な弁護士で、ある事件のため、シカゴの本社からロサンゼルス支所に出向してきた。次にあげるのは、Taylorと秘書の

Lindaがクライアントについてやり取りする場面である。

“Did he say what it’s about?”

“Sorry, no, Ms. Donovan.”

Taylor headed into her office as she called back a message to Linda. “Call Sam’s secretary and let him know I’ll be there in five minutes.”

Then she poked her head back out the door and smiled at her new assistant.

“And Linda, remember--it’s Taylor” (p.4).

Taylorは秘書のLindaをずっとファーストネームで呼んでいるが、LindaはTaylorをMs. Donovanとラストネームで呼び続け、相手と自分との社内での階級を意識していることがうかがえる。それに対してTaylorは、自分の名は“it’s Taylor”なのだと言い、ファーストネームで呼んでほしいという要望を伝えている。ここにも、ラストネームからファーストネームへという、自分の呼び方（＝自称詞）を意図的に変えさせることで、相手との心的距離を意識的に縮めようとしている話者の意図が現れているのである。

（事例1.1.E）Thomas Hardy（1891）の*Tess of the D’urbervilles*

ここまでの4つの例はいずれも20世紀後半から21世紀に刊行された、新しい作品のものであった。今度は、英国の古典である、19世紀の末に刊行されたThomas Hardyの*Tess of the D’urbervilles*から、自分をどう呼んでもらいたいかというところに話者の心理が現れた例を見てみよう。主要登場人物の一人であるAngel Clareは牧師の息子だが、聖職には就かず酪農家のもとで仕事をしている。その農場で働く娘、TessにClareは心を惹かれるが、辛い過去のあるTessは彼への恋心を封印しようとしていた。しかし、ClareはTessとの結婚を決意する。次にあげるのは、Tessと結婚したいという願望を実家に報告して帰ってきたClareが彼女と出会った場面である。

‘O Mr Clare! How you frightened me--I--’

There had not at first been time for her to think of the changed relations which his declaration had introduced; but the full sense of the matter rose up in her face when she encountered Clare’s tender look as he stepped forward to the bottom stair.

‘Dear, darling Tessy!’ he whispered, putting his arm round her, and his face to her flushed cheek. ‘Don’t, for Heaven’s sake, Mister me any more’ (p.198).

Clareへの愛を自覚しながらも、過去のある自分は彼と結婚できないと思うTessは頑なに“Mr Clare”（原文のまま）と相手呼び続けている。しかし、ここでClareは“Mister me any more”（原文のまま）と言い、自分をもうラストネームで呼ばないでくれとTess



に頼むのである。このやり取りから、ここまであげた4つの事例と同様に、ラストネームには他人行儀な気持ちやよそよそしさ、フォーマルな感じ、階級意識が存在すると考えられる。また、ファーストネームには親密な気持ち、インフォーマルな感じが存在し、階級意識は希薄であると考えられる。この作品の書かれた19世紀末でも、ファーストネームとラストネームの使い分けが現代と同様だという可能性がうかがえる例である。また、自分の呼び方(=自称詞)を意図的に変えさせることで、相手との心的距離を意識的に縮めようとしている話者の意図が現れていることも、20世紀や21世紀の小説の場合と同様だと思われる。

#### 4.1.2. 相手との心的距離を縮めたいという話者の心理が反映された呼び方——対称詞

ここでは、対称詞における、相手との心的距離を縮めたい、あるいは相手との心的距離を縮めることを目的とした話者の心理が反映された呼び方の例を取り上げる。

##### (事例1.2.A) Julie James (2008) の*Just the Sexiest Man Alive*

次の例は(事例 I.1.D)で取り上げた、Julie Jamesの*Just the Sexiest Man Alive*の別の箇所、ヒロインのTaylorが、ヒーローのJasonを初めてファーストネームで呼んだ場面である。ハリウッドの人気俳優ではあるが傲慢でわがままなJasonを、仕事の関係から相手にすることになってしまったTaylorはずっと彼に反感を持っていた。しかし、軽薄に見えたJasonが仕事に打ち込む姿を目にして、Taylorは彼への自分の評価が偏ったものだったことに気づき、好意さえ感じ始める。そして、映画で弁護士役を演じようとするJasonをついにファーストネームで呼ぶのである。

“You will make a great attorney, Jason.”

It was the first time she said his name (p.67).

それまで“Mr. Andrews”と、Jasonをラストネームで呼び続けていたTaylorがファーストネームを用いたことの重要性は、著者が叙述の文で“*It was the first time she said his name*”とわざわざ強調していることから明確である。このように、相手の呼び方(=対称詞)からは、話者がどんな意図を持って相手を呼んでいるのかが読み取れる。相手をラストネームで呼ぶことからファーストネームで呼ぶことへの変化には、話者の心理が反映されている。すなわち、この例が示しているように、対称詞にも相手との心的距離を縮めることを目的とした話者の心理が反映されているのである。

##### (事例1.2.B) John Holton Crawford (2009) の*Don't call me Michael*

今度は児童文学の中で、相手をどう呼ぶかということに話者の心理が反映された例を見てみよう。おとなしくて優等生タイプの小学生であるChristopherは転校生のMikeからさんざんいじめられている。Mikeは決して“Christopher”とは呼ぼうとせず、“Four

Eyes” “Chrissy Boy” “Carrot Top” だのとさまざまなあだ名で彼を呼び続けていた。ところが、ある日、Mikeは井戸に落ちてしまい、そこにやってきたChristopherに助けを求める。以下はその場面である。

“Get me……out of here……please……Christopher,” Mike begged.

Christopher? Had Mike actually called him Christopher? Not Four Eyes, not Carrot Top, not any of those other names? He’d actually called him Christopher (p.72).

Mikeから“Christopher”と呼ばれて驚くChristopherの心理が明確に描かれている。それまで絶対に本当の名前を呼んでくれなかったMikeが、自分との距離を詰めようとして“Christopher”と呼んでくれたことをChristopherは感じ取っているのである。一方、話者であるMikeのほうは相手であるChristopherをファーストネームで呼ぶことで、これまでひどいことをしてきた相手に許してもらいたい、危機に陥った自分を助けてほしいという気持ちを表している。つまり、あだ名で呼ぶことからファーストネームで呼ぶことの変化に、話者の心理が反映されているのである。同時に、ファーストネームで呼ぶことの重要性もここから読み取れる。

#### 4.1.3. 相手に第三者との心的距離を縮めてほしいという話者の心理、あるいは相手と第三者との心的距離の近さを意識した話者の心理が反映された呼び方——他称詞

ここでは、相手に第三者との心的距離を縮めてほしいという話者の心理、あるいは相手と第三者との距離の近さを意識した話者の心理が反映された呼び方を他称詞に見てみる。

(事例1.3.A) Amanda Browning (2008) の*The Billionaire’s Defiant Wife*

(事例1.1.B) で取り上げたAmanda Browningの*The Billionaire’s Defiant Wife*の一場面のすぐ前のやり取りが次にあげるものである。(事例1.1.B) でも述べたように、ヒロインのAimiは外科医である雇い主、Nick Berkeleyを“Nick”とファーストネームで呼んでいる。すると、それを聞きとがめた、Nickの兄であるJonasが次のようにたしなめる。

‘Nick? That doesn’t sound very professional to me.’ Jonas goaded, and Aimi smiled faintly (p.18).

ここでは第三者であるNickの呼び方についての議論が行われている。雇い主をファーストネームで呼ぶAimiの姿勢を、Jonasは“‘That doesn’t sound very professional to me”と批判しているのだが、そこには本来、自分よりも階級が上の存在である雇い主をファーストネームで呼ぶべきではないというJonasの前提が存在しているわけである。そこでこのような批判の言葉が出るわけだが、そのすぐあとでJonasは(事例1.1.B) であげたように、自分のことをファーストネームで呼んでくれとAimiに頼む。実は、Jonasが

Aimiに関心を寄せていることがこの前後の話の流れからわかり、(事例1.1.B) で述べたように彼はAimiとの心理的な距離を縮めたがっている。Jonasが“Nick”という呼び方に反応したのは、そこに単なる雇い主と従業員の関係以上の感情があることを察したからである。つまり、Aimi(=相手)がNick(=第三者)に用いる呼び方に、彼女の感情が現れているとJonas(=話者)は推測したのだ。このように、第三者をファーストネームで呼ぶ(=他称詞)ことには、相手(=呼び方の対象となっている第三者)との心的距離を縮めたいという話者の心理が反映されるのである。

(事例1.3.B) Sandra Marton (2012) の*Sheikh Without a Heart*

(事例1.1.C) でも取り上げたSandra Martonの*Sheikh Without a Heart*から、第三者との心理的な距離が、第三者の呼び方に反映された例をもう一つ見てみよう。次にあげるのは、(事例1.1.C) でのヒロインのRachelと、彼女のもとを訪ねてきたシークのKarimとのやり取りの直前の会話である。王位継承者としてどうしても赤ん坊のEthanを手に入れたいKarimは、自分のもとで育てさせたほうがEthanは幸せになれると、Rachelを説得しようとしている。そこで、話し合いでことを収めようと、KarimはRachelに次のように話しかける。

“We are adults,” he said calmly. “And we both want what is best for the boy.”

“Ethan, you mean” (p.91).

この場面では、Karimが赤ん坊を“the boy”と呼んでいる点に注目したい。KarimにとってEthanは一人の人間であるというより、「王位継承者」という役割を持った、単なる象徴にすぎないのである。だからKarimにとって、赤ん坊はEthanという名を持った個人ではなく、王位継承権を持つことができる存在、すなわち「男の子」であるという意識が先立ち、“The boy”という言葉が出てくる。これに対してRachelは、“The boy”ではなく、“Ethan”だと、赤ん坊が名前を持った一人の人間であることを指摘する。RachelにとってEthanは愛情の対象であるのに対して、この赤ん坊を知ったばかりのKarimにとっては「男の子」であるという曖昧な対象でしかないことが、名前の呼び方から読み取れる。第三者であるEthanの呼び方に、話し手であるRachelとKarimそれぞれの立場の違いや心理の違いが明確に現れている。RachelとEthanとの心的距離は近く、KarimとEthanとの心的距離は遠い。このように、第三者の呼び方(=他称詞)には、話者の心理が反映していることがわかる。

#### 4.2. 相手との心的距離をあげたいという話者の心理が反映された呼び方

前項では、相手との心的距離を縮めたいという話者の心理が反映されている例を、ファーストネームを用いるケースを中心としていくつか見てきた。今度は、相手との心的距離をあげたいという話者の心理が反映された事例を取り上げる。1. 話者が相手から心的距離

を置くことを目的とした、自分を呼んでもらう呼び方 (= 自称詞)、話者が相手と呼ぶ呼び方 (= 対称詞)、および、第三者との心的距離をあげたいという話者の心理が反映された、第三者を呼ぶ呼び方 (= 他称詞) について事例を挙げて分析する。

#### 4.2.1. 相手との心的距離をあげたいという話者の心理が反映された呼び方——自称詞

ここでは、自称詞における、相手との距離を広げたい、あるいは相手から距離を置くことを目的とした話者の心理が反映された呼び方の例を取り上げる。

(事例2.1.A) John Holton Crawford (2009) の *Don't call me Michael*

まずは、(事例1.2.B) でも取り上げた、John Holton Crawfordの児童文学である *Don't call me Michael* から例を見てみよう。いじめっ子の転校生Mikeからいつものように嫌がらせをされていたChristopherが、彼を“Mike”ではなく、正式なファーストネームである“Michael”と呼んだ場面が次にあげるものである。

“I'm practicing for the baseball team. I'll probably be the starting pitcher. What'd ya think of that, Four Eyes?”

“Good for you, Michael.” Christopher answered almost in a whisper without looking at him,

“Don't you ever call me Michael again.” Mike snarled as he dropped the apples and punched Christopher in the stomach. “Nobody ever calls me names, Fatso. Nobody. You got that?” (p.14)

それまでChristopherは“Michael”という呼び方を使ったことがなく、常に“Mike”と呼んでいた。ここで“Michael”と呼ばれたMikeは、そのあとChristopherへのいじめをエスカレートさせる。その理由は物語のあとのほうになってわかる。実は、MikeがChristopherたちの街へ引っ越してくる直前に、彼の母親は突然の事故で亡くなっていた。その母親だけがMikeのことを“Michael”と呼んでいたことがあとで説明される。母親を失った心の傷が癒えず、弱い者いじめに走っていたMikeは誰にも心を開こうとしていなかった。だから、母親から呼ばれていた名前がChristopherから呼ばれたことが我慢できず、“Don't you ever call me Michael again”と言うのである。Mikeにとって、“Michael”と自分自身を呼んでもいい相手は亡き母親だけだった。“Michael”と呼ぶなと言うことによって、Mikeは意識的にChristopherから距離を置いている。つまり、ここでは自分に対する呼び方 (= 自称詞) に、相手との距離をあげたいという話者の心理が反映されていることがわかる。

#### 4.2.2. 相手との心的距離をあげたいという話者の心理が反映された呼び方——対称詞

ここでは、対称詞における、相手との心的距離をあげたい、あるいは相手から距離を置

くことを目的とした話者の心理が反映された呼び方の例を取り上げる。

(事例2.2.A) Sandra Marton (2012) の*Sheikh Without a Heart*

相手との心的距離をあけたい、あるいは相手との距離感を意識して用いられた対称詞の例を取り上げる。ここでは(事例1.1.C)で取り上げた事例を再掲する。シークであるKarimが、一般人のRachelのところへ来て、赤ん坊のEthanをめぐる話をする場面である。

“We are adults,” he said calmly. “And we both want what is best for the boy.”

“Ethan, you mean.”

“Yes. We want the right thing for him. There’s no reason we should be enemies.”

“And what is it you see as the right thing, Your Highness?”

“Please. Call me Karim” (p.91).

(事例1.1.C)でも説明したように、RachelはシークであるKarimを“Your Highness”という敬称で呼び、相手への敬意を示すと同時に、相手から距離を置いている。Karimにファーストネームで呼んでくれと言われても、その後しばらくの間、Rachelは“Your Highness”という敬称を使い続け、彼と親しくなろうとはしない。彼女がようやくシークをKarimと呼んだのは、彼に心を許すようになってからだった。“Your Highness”という敬称は話者が相手との距離を意識した呼び方で、敬意や身分の差を反映させたものである。このように、対称詞は相手との距離をあけるために意図的に用いられる場合もあることがわかる。

(事例2.2.B) Erich Segal (1970) の*Love Story*

今度はErich Segalの*Love Story*から、相手との心的距離をあけたいという話者の心理が現れた対称詞の例を見てみよう。アメリカの名門の御曹司である主人公のOliverと、貧しいイタリア系移民の娘であるJennyの悲恋を描いた作品だが、次にあげるのはOliverと彼の父親とのやり取りである。

“How’ve you been, son?”

“Fine, sir”

“Does your face hurt?”

“No, sir” (p.19).

注目したいのは、Oliverが父親に対して“sir”という敬称を使っていることである。Oliverは“father”という、一般的に息子が父親を呼ぶ場合の呼称も用いているが、“sir”も頻繁に使われている。男性への丁寧な呼びかけである“sir”を息子が父親に対して用いているところに、Oliverと彼の父親との関係が反映されているのである。つまり、この

父と息子の間柄にはいくらか遠慮やよそよそしさが見られるということだ。それはあとになって、身分違いのJennyに恋したOliverへの父親の厳しい仕打ちを暗示するものともなっている。このように、対称詞には話者が持っている相手との距離感が反映されることもある。

#### 4.2.3. 相手に第三者との心的距離をあけてほしいという話者の心理、あるいは相手と第三者との心的距離の遠さを意識した話者の心理が反映された呼び方——他称詞

ここでは、相手に第三者との心的距離をあけてほしいという話者の心理、あるいは相手と第三者との距離の遠さを意識した話者の心理が反映された呼び方を他称詞に見てみる。

##### (事例2.3.A) Anne Tyler (1995) の*Ladder of Years*

Anne Tylerの*Ladder of Years*の例を見てみよう。ヒロインのDeliaは一人の女性としての生き方を探るために家族のもとを離れ、住みこみの家政婦として生計を立てている。Deliaの雇い主の息子である中学生のNoahは彼女をファーストネームで呼ぶ。つまり、NoahはDeliaに対して“Delia”というファーストネームを対称詞として用いているのである。いつものようにNoahがDeliaに対してファーストネームで呼びかけた場面が次にあげるものだ。

Noah burst out the front door. “Delia! Hi!” he called.

“Ms. Grinstead to *you*,” Belle muttered under her breath. She told Delia, “Don’t you let them treat you like a peon” (p.213).

Deliaをファーストネームで呼んだNoahを、そこに来っていたDeliaの友人であるBelleが“Ms. Grinstead to *you*”（イタリックは原文のまま）、すなわち「あなたにとってはミズ・グリンステッドでしょう」とたしなめている。中学生にファーストネームで呼ばせてはだめだ、というBelleの心理がここから読み取れる。さらにBelleはDeliaに向かって、“Don’t you let them treat you like a peon”と念を押す。つまり、ファーストネームで呼ばれることは、相手と同等の地位もしくは相手よりも下位の地位に位置することを示している。それを避けるため、Noahには“Ms. Grinstead”と、ラストネームで呼ばせなければいけないということなのである。ラストネームを使うことによって、中学生のNoahと大人のDeliaの立ち位置に変化が起きる。そのような変化を好ましくないと思うBelleの心理が、彼女にとっては第三者であるDeliaの呼び方（＝他称詞）に反映されている。つまり、話者（＝Belle）が相手（＝Noah）に要求している第三者（＝Delia）の呼び方（＝他称詞）は、第三者に対する心理的な距離をあけるためのものである。このように、ラストネームを使うことが、第三者への心的距離をあけるという目的にかなう場合もある。



(事例2.3.B) Anne Tyler (1995) の*Ladder of Years*

もう一つ、上記と同じAnne Tylerの*Ladder of Years*から例を取り上げる。この作品の主人公であるDeliaは家政婦をしている家の息子Noahの祖父、Natと知り合う。妻を亡くしていたNatは若い女性であるBinkyと再婚することになった。ところが、Natと前妻との間に生まれた娘たちは、父親がBinkyと再婚することを絶対に認めようとしない。次の台詞はそんな娘たちが父親のNatに電話をかけてくる時の様子を、Binkyが語ったものである。

Binky shook her head, smoothing a cookbook page with her palm. “They phone him and the very first thing, ‘Is *she* around?’ they ask. ‘She,’ they call me; they never use my name if they can help it (p.265).

娘たちはBinkyのことを父親に尋ねる時、決して名前を呼ぼうとはしないというわけである。娘たちはBinkyをいつでも“she”と呼んでいる。それが意図的なものであることは、“‘She,’ they call me; they never use my name if they can help it”と語っているように、Binkyも感じている。娘たちにとってBinkyは名前を持った一人の人間として認めることはできない存在、代名詞の“she”としてしか語る価値のない存在であることがうかがえる。ここには第三者を名前で呼ぶことと、代名詞で呼ぶこととの差が明確に現れている。第三者の呼び方(=他称詞)として、名前で呼ぶことには話者のその第三者への親しみなど、相手との距離を縮めたいという心理が反映されている。それに対して、代名詞で第三者を呼ぶことには、その第三者との心的距離をあけたいという心理が反映されているのである。

(事例2.3.C) Ruth Jean Dale (2012) の*Runaway Wedding*

今度はRuth Jean Daleのロマンス小説、*Runaway Wedding*から、会話が交わされた現場には不在の第三者に対する呼び方に、話者の気持ちが現れた例を見てみよう。この小説のヒロインであるLarkは、Jaredと8年ぶりに再会する。Larkに婚約者がいることを知ったJaredが、その婚約者について述べたのが以下の台詞である。

“God only knows what you might bump into—or what might bump into you. How would I explain that to Mr. Right?” (2012)

ここではまだJaredは婚約者の名を知らない。しかし、貧しい自分と違って裕福であり、結婚相手として申し分ない条件を揃えている男らしいと推測し、“Mr. Right”と呼ぶ。これに対してLarkは次のように反論する。

“Don’t call him that!” Keeping up with his long strides wasn’t easy, even with him pulling her along. “He has a name” (2012).



“Mr. Right”とは、夫としてふさわしい人、理想の男性を指す英語の表現であり、Jaredはこれを用いることによって、Larkの婚約者を皮肉っている。それに対してLarkは、自分の婚約者が“He has a name”だと、名前を持った一個の人格であることを主張するのである。ここでは、Jaredが第三者であるLarkの婚約者に用いた呼び方（=他称詞）に、話し手であるJaredの心理が反映されている。“Mr. Right”という呼び方には、Larkの婚約者である男性へのJaredの嫉妬やコンプレックスといった感情が込められていると推測できる。すなわち、話者であるJaredが用いた“Mr. Right”というこの他称詞には、第三者との距離があることを感じている心理が反映されているのである。

(事例2.3.D) James Fenimore Cooper (1823) の*The Pioneers*

事例Ⅱにおいてここまで取り上げてきた作品は、いずれも20世紀後半から21世紀に刊行された新しいものであった。最後に、米国の古典である、19世紀に刊行されたJames Fenimore Cooperの*The Pioneers* において、他称詞の例を見てみよう。領主をしている、判事のMarmaduke Templeのところへ、一人娘のElizabethが4年ぶりに帰ってくる。Elizabethは教育を受けるためにニューヨークへ行っていたのだが、その間に彼女の母親、つまりMarmadukeの妻が亡くなった。そのためTemple家を切り盛りしていたのが、家政婦のRemarkableで、彼女は自分が女主人のように感じていたのだった。以下にあげるのは、Elizabethが帰ってきた日のMarmadukeとRemarkableとのやり取りである。MarmadukeがRemarkableの料理を褒めると、彼女はこのように言う。

“I’m glad if the Judge is pleased; but I’m notional that you’ll find the sa’ce overdone. I thought, as Elizabeth was coming home, that a body could do no less than make things agreeable” (p.106).

RemarkableはElizabethが小さかった頃から彼女を知っている。そこで以前のように“Elizabeth”と呼んだわけだが、Marmadukeはこれを聞きとがめて次のように告げる。

“My daughter has now grown to woman’s estate, and is from this moment mistress of my house,” said the Judge; “it is proper, that all, who live with me, address her as Miss Temple” (p.106).

もはや子供ではない、若い娘となった“Elizabeth”を、それまでTemple家を切りまわしていたとはいえ、使用人であるRemarkableがファーストネームで呼ぶことの不適切さをMarmadukeは指摘する。そして、“Elizabeth”を“Miss Temple”と呼ぶようにと命じるのである。それに対して、Remarkableはこう反論する。

“Do tell!” exclaimed Remarkable, a little aghast; “well who ever heard of a young

woman's being called Miss? If the Judge had a wife now, I shouldn't think of calling her any thing but Miss Temple; but--" (pp.106-107).

Remarkableにとって“Miss Temple”と呼べる相手は、主人であるMarmadukeの妻だけだという主張である。つまり、ここにはまだElizabethをTemple家の女主人としては認められないというRemarkableの心理が反映されている。しかし、再婚しないMarmadukeは娘をTemple家の女主人と考えており、Remarkableにこう言い渡すのである。

“Having nothing but a daughter, you will observe that style to her, if you please, in future,” interrupted Marmaduke (p.107).

以上のようにここでは“Elizabeth”と“Miss Temple”という、第三者の呼び方（＝他称詞）の使い分けが問題となっている。会話をしているMarmadukeとRemarkableにとっての第三者であるElizabethの呼び方に、話し手それぞれの心理が現れる。MarmadukeにとってElizabethはまだ子供であり、一家の女主人の役割を果たすものとは思われない。そのため、家政婦という使用人の身であるにもかかわらず、RemarkableはElizabethをファーストネームで呼ぶ。ここには自分がElizabethと対等ではないまでも、距離的に遠い存在であることを意識していないRemarkableの心理がうかがえる。一方、MarmadukeにとってElizabethはもう立派な成人女性として一家の女主人役を果たせる存在と映っているため、使用人であるRemarkableがファーストネームを使うことを黙認できない。そこで、RemarkableにElizabethとの隔たりがあること、階級の差を自覚させようとして、ラストネームを使うようにと命じる。つまり、話し手であるMarmadukeが相手のRemarkableに、第三者であるElizabethとの心的距離をあけるようにと使っている呼び方が、“Miss Temple”なのである。このように、第三者の呼び方（＝他称詞）には、相手に第三者との心的距離をあけてほしいという話者の心理が反映されたものがある。

## 5. まとめ

以上のように10点の英米の文学作品を調査対象として、その会話に現れた自称詞、対称詞、および他称詞について、話者の心理がどのように反映されているかを見てきた。その結果、以下の特徴が考えられる。

- 1) 自称詞、対称詞、および他称詞にはファーストネームとラストネームが用いられる場合が多い。また、ファーストネームとラストネームの使い分けには話者の心理が反映されている。
  - ・ファーストネーム＝親密さ、インフォーマル、階級意識が希薄、知り合ってから時間が長い
  - ・ラストネーム＝他人行儀でよそよそしい、フォーマル、階級意識が強い、知り合っ

からの時間が短い

例：(事例1.1.A)、(事例1.1.B)、(事例1.1.C)、(事例1.1.D)、(事例1.1.E)、(事例1.2.A)  
(事例1.2.B)、(事例1.3.A)、(事例1.3.B)、(事例2.1.A)、(事例2.3.A)、(事例2.3.D)

2) 敬称には話者が階級の差、身分の差を意識していること、相手との距離を自覚していることが現れている。

例：(事例2.2.A) の “Your Highness”、(事例2.2.B) の “sir”

3) 代名詞で相手と呼ぶことは、名前を呼ぶことよりも話者が相手に心理的な距離を感じていることを示している。

例：(事例2.3.B) の “she”

4) 名前や代名詞以外の呼び方をあえて用いた呼び方に、話者の心理が反映されているものがある。

例：(事例2.3.C) の “Mr. Right”

このように英米の文学作品の会話に現れた話し手（話者）と聞き手（相手）および第三者の呼び方を分析した結果、話者が用いた自称詞、対称詞、および他称詞には話者の相手への心理や、第三者への心理が反映されていることがわかった。また逆に、話者が相手との心的距離を縮めることやあけることを目的として意図的に自称詞、対称詞、および他称詞を用いる場合もあると考えられる。特にファーストネームとラストネームの使い分けや、ファーストネームからラストネームへの変化などの名前の呼び方の変化には、話者の心理が反映されている。自称詞と対称詞、および他称詞に注目することによって、話者の対人関係上の問題が読み取れることが考えられるのである。

今回の研究では、分析対象として限られた文学作品しか取り上げることができなかった。今後はさらに多くの文学作品を分析することが課題である。さらに、今後の研究課題としては、作品の時代別に自称詞、対称詞、および他称詞の使用例を調査することが残っている。現代文学と古典文学における敬称の使用例の変化などはその一例である。加えて、本研究では触れられなかったが、文学作品を映画やドラマと比較して、自称詞、対称詞、および他称詞を研究することも重要であろう。会話調査の形をとった実際の会話例のみならず、このように人が意図的に作り上げた媒体における会話から研究することが、自称詞、対称詞、および他称詞の研究の幅を広げるために大いに役立つものと考えられる。

#### 参考文献

明石一紀. (1991). 「親族名称の謎——「父」と「母」の謎——ことばからみた古代日本の家族」. 『言語』, 7, 30-37. 大修館書店.

- Browning, Amanda. (2008). *The Billionaire's Defiant Wife*. London: Mills and Boon.
- 陳露. (2003). 『日中両言語における人称代名詞及び親族用語の対照研究』. 千葉大学大学院社会文化科学研究科博士論文.
- Cooper, James Fenimore. (1823). *The Pioneers*. (Ed.) Donald A. Ringe. rpt. London: Penguin, 1988.
- Coulter, Catherine. (1998). *False Pretenses*. New York: Signet Book.
- Crawford, Joyce Holton. (2009). *Don't Call me Michael*. Mustang: Tate Publishing.
- Dale, Ruth Jean. (2012). *Runaway Wedding*. Toronto: Harlequin Books. Kindle ebook file.
- Hardy, Thomas. (1891). *Tess of the D'urbervilles*. (Ed.) P. N. Furbank. London: MacMillan, 1975.
- James, Julie. (2008). *Just the Sexiest Man Alive*. New York: Berkley Publishing Group.
- 唐須教光. (1991). 「親族名称の謎—親族名称の意味」. 『言語』, 7, 70-74. 大修館書店.
- 久保田正人. (2007). 「Don't call her "she."—外界指示と言語内指示」. 『言語文化論叢』, 1, 1-8. 千葉大学言語教育センター.
- Marton, Sandra. (2012). *Sheikh Without a Heart*. Surrey: Mills and Boon.
- 中根千恵. (1980). 『タテ社会の人間関係』. 講談社.
- 齊霞. (1988). 「対称の代名詞についての一考察——日中の対称を比較して——」. 『研究と資料』, 12, 1-17. 国語学研究と資料の会.
- Segal, Erich. (1970). *Love Story*. (Ed.) Koji Kamioka. rpt. Tokyo: Eikosha Publishers, 1971.
- 鈴木孝夫. (1982). 「自称詞と対称詞の比較」. 『日英語比較講座 第5巻 文化と社会』, 17-59. 大修館書店.
- 武井睦雄. (1982). 「親族語彙の歴史」. 『講座日本語学4 語彙史』, 明治書院.
- Tyler, Anne. (1995). *Ladder of Years*. New York: Ivy Books.
- 鷺山真澄. (1993). 「親族名称の分析について」. 『情報処理学会研究報告自然言語処理(NL)』, 79, 1-7.
- 王冰菁. (2009). 「日中接触場面の会話における人称詞の言語管理——中国人日本語学習者側を中心に——」. 村岡英裕(編)『接触場面の言語管理研究：人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』, 218, 125-137. 千葉大学大学院人文社会科学研究科.